

# 藝大通信

08  
MARCH  
2004

TOKYO  
GEIDAI  
東京芸大広報誌

特集 芸大の新しい発信基地、取手。

[座談会] 改革の拠点として。

—取手校地の12年とその未来像をさぐる—

飯野一朗／渡辺好明／小山穂太郎／西岡龍彦

取手キャンパスを歩く 案内人・田中一幸

開かれた大学8 学生オーケストラ

学生のいる風景8 國際交流会館

芸大短信

再考:近代日本の絵画 美意識の形成とその展開

藝大ドヴォルザーク・プロジェクト



「転位95-地-VI」  
etching lithograph 二版刷 44×34.5cm 1995年

# 藝大通信

No.08

TOKYO GEIDAI

東京芸術大学広報誌

中林忠良 (なかばやし・ただよし)

1937年東京生まれ。

1963年東京芸術大学絵画科油画専攻卒業。65年同大学院修了。78年版画研究室講師、81年助教授、89年から教授。99年4月から評議員。2003年紫綬褒章受章。

「転位」シリーズは、白と黒の拮抗と調和がテーマ。日常に潜む浮遊感を支点とし、自身の足元を掘りおこす試みがなされている。作品はやがて、地の生と死の深さに囚えられ、それが描くこと（黒）描かないこと（白）という制作のしくみとからみ合って、白と黒の世界に収斂した。

## 東京芸術大学広報誌 藝大通信第8号

編集発行 東京芸術大学広報委員会

編集委員 野田暉行（副学長・音楽学部作曲科教授）

長谷部浩（美術学部先端芸術表現科助教授）

渡邊健二（音楽学部器楽科助教授）

太田和良幸（事務局長）

アートディレクター 蓮見智幸（美術学部デザイン科助教授）

制作 株式会社 G凡社

発行日 平成16年3月20日

お問い合わせ先

東京芸術大学総務課

〒110-8714 東京都台東区上野公園12-8

電話 03-5685-7509 FAX 03-5685-7760

e-mail jkikaku@off.geidai.ac.jp URL http://www.geidai.ac.jp

### 第8号目次

- 3-11 特集 芸大の新しい発信基地、取手。  
4-7 [座談会] 改革の拠点として。  
—— 取高校地の12年とその未来像をさぐる  
飯野一朗／渡辺好明／小山穂太郎／西岡龍彦  
8-9 学科紹介 先端芸術表現科 藤幡正樹  
音楽環境創造科 熊倉純子  
10-11 取高校キャンパスを歩く 案内人・田中一幸
- 12-13 NEWS 2003.11～2004.2  
何が変わるのが「大学法人化」
- 14-15 タイムカプセルに乗った芸大  
【第8回】1971～1980年  
佐藤道信〈東京芸術大学美術学部1970年〉  
瀧井敬子〈東京芸術大学音楽学部1977年〉
- 16-17 開かれた大学⑧  
学生オーケストラ  
海外へ地方へ、活躍の場が広がる 有賀誠門
- 18-19 学生のいる風景⑧  
国際交流会館  
都心から離れた留学生の拠点 趙 洗淵
- 20-23 芸大短信 2004.4～2005.3  
春から夏への大学美術館  
再考：近代日本の絵画 美意識の形成とその展開  
春から夏への奏楽堂  
藝大ドボルザーク・プロジェクト

### 第8号刊行にあたって

芸大は歴史的な上野公園内のはかに、取手市の利根川のほとりにもキャンパスを展開しています。新しい校地で芸大は何を成すべきか、未来に向けての検討が重ねられるなか、先陣として美術学部による授業が開始されたのはもう12年も前になります。施設や交通のまだ整備されていない初期の開拓期に、孤軍奮闘、並々ならぬ苦労と努力を重ね未来を切り開いたパイオニアたちを改めて勞いたいと思います。それは現在への大きな可能性に繋がり、新しい時代へ向けた「先端芸術表現科」の開設となりました。それに続き、近年「音楽環境創造科」も開設されました。共通工房としての役割とともに、取高校地の意義は年々新たに深められ、また問われ続けております。

今回は、この取高校キャンパスの未来へ向けての展望と現実の問題点等を現場の先生方が語るとともに、取高校地の紹介をいたします。

上野とはまたひと味違った取高校にぜひ一度足をお運びいただきたいと思います。

さて、この芸大通信も8号を迎えました。いよいよ法人化の年を迎えますが、この小誌もこれを一つの節目と捉え、来年度から新しい企画と方針で出発する予定です。

ご愛読に感謝するとともに、ますますご愛顧のほどよろしくお願い申し上げます。

藝大通信編集委員長  
副学長（企画担当）  
野田暉行

特集

# 芸大の 新しき 取手。基地、

改革の  
拠点として。  
取高校地の十二年と  
その未来像をさぐる

芸大が一年生をはぐくむ培地として  
学部教育の展開をめざし、

取高校地に新たな場を求めて、十二年の歳月が過ぎた。  
共通工房は、最大級の規模、設備を誇り、学科をまたいだ  
複合的なカリキュラムも成果をあげつつある。  
大学院までの一貫した教育を行う先端芸術表現科が加わり、  
さらに、昨年、音楽学部も、音楽環境創造科を新設した。  
地域に根ざし、国際性を持つ教育研究の拠点として、  
取高校地の未来像を両学部教官が熱く語り尽くした。

## 取高校地の展開

渡辺 取高校地が開校したのは一九九二

発展を続ける取高校地を  
現在・過去・未来をテーマにした座談会  
先端芸術表現科・音楽環境創造科の紹介  
そしてキャンパス・ガイドから明らかにする。



翌年には美術学部としての展開が始ま  
ったものでした。

つて、油画の一年生がまず先鞭を点ける形で展開して、それに伴つて一部の大学院、私が担当していました壁画の研究室、

デザイン科では内山先生の映像の研究室が展開する。共通工房と連携しながら、取手の最初の授業が始まったわけです。

美術学部では、取手校地において大学院を中心とするのか、学部の一部の展開、あるいは一部の科（デザイン科）を中心とした展開にするのか、移転直前までさまざまな議論があつたわけですが、一年生の基礎教育を複合的に取手で行うのがいいのではないかという結論に達して、

それに基づいて油画、デザイン、日本画、工芸、彫刻、建築と順次、展開してきたわけです。つまり、上野に対して取手が一年生の基礎教育の場であるという位置づけになつたのです。その趣旨としては低学年において各科の垣根をある程度取り払つたところで、複合的に基礎的な技術や技法を学ぼうということです。

それ以来、美術学部としては一年間だけの取手キャンパスでの授業と一年生以後の上野での授業との関係を探つてきたわけですが、やはり上野の分校的な在り方は否めませんでした。こうした背景もあって、五年前の九九年に先端芸術表現科という、取手で卒業生を出し大学院生まで育していく科を新設することになりました。

また、音楽学部としては長らく取手のほうは手つかずだったわけですが、一昨年から音楽環境創造科という、音楽学部として取手校地を積極的にどうえていく

ような科が立ち上りました。

西岡 音楽環境創造科は、今まで上野で

やつてこなかつたことに取手で取り組もうということで二〇〇二年に発足しました。

音楽文化そのものが非常に多様化しているので、音楽だけでなく、音や音響かかるさまざま表現、例えば、映像・舞台・舞踊等についても積極的に音楽の側から研究していくこう、ということがあります。それからアートマネジメントや文化政策です。これは、聴衆を発掘し育て、音楽の創作と同時に聴衆とのかかわりを考えていこうというものです。この学科では音楽を、その周辺を含めた広い意味でとらえています。

音や音響については、芸大では三十年以上も前から、音響研究室でアナログ・シンセサイザーを使うなど、世界的に見ても新しい音楽の創作・研究に取り組んできましたが、独立した一つの科として二年前から本格的にスタートしたのです。

飯野 私は共通工房長になつて二年目になります。第三学部構想というのが以前にありまして、一つの科を取手にもつてきて、学部を立ち上げていこうということでした。それに伴い、上野ではできない大型の機械や最新の設備をまとめて取手校地で展開し、基礎知識がある大学院生や上級生が使いこなせるようになる形で始まつたのです。基本構想としてはまだ今後増えていく予定ですが、第一期が完成した状態で十二年間継続しています。

# 飯野一朗



共通工房長  
工芸科彫金研究室助教授  
1949年埼玉県生まれ  
1976年東京芸術大学大学院彫金研究生修了  
1977~88年東京芸術大学美術学部工芸科彫金研究室  
非常勤講師  
1988年東京芸術大学美術学部工芸科彫金研究室助手  
92年講師 94年~助教授  
2002年東京芸術大学取手校地共通工房工房長  
(社)日本クラフトデザイン協会会員／ドイツ・インターナショナル・ジュエリー・アート協会会員

とつていくべきだと思います。

飯野 私自身工房長といつても、本拠地は上野にある工芸科の彫金講座の一員で、実際は各工房をとりまとめる立場だといえます。また、現状の表現主体ではなくて、素材別の工房になつてているという点も、少し考える必要があると思います。ゆくゆくはセンターを統括する長のもので、運営していく場にすることが望ましい形でしよう。

## 一年生にとつての取手

小山 私は専任になつて五年目、その前も非常勤でいましたので、取手校地には長くかかわっています。油画科で一年生の複合授業を受け持つてきたので、取手はそれをやる場だという印象がありました。つまり科の枠をはずして、一年生の基礎学習をやる。ほかの科の先生と組んで新たな授業を構成する、基礎を固定して考えるのではなく、常に新しい問題をも取り込んで考える場であるという認識です。

渡辺 取手の共通工房は、世界中の大学を見渡してもこれだけの加工施設を持っているのは驚くべきことで、つくれないものはないのではないか、というほど立派な施設です。活発に利用されていると思いませんけれども、実質的には非常勤の人たちだけで運営されているという現状は大きな問題で、しつかりとした体制を

ただ、すべての科が同じことを横並びでやるのではなくて、柔軟な場が必要だ

るうと思います。先端に続き音楽環境創造科もできることで、サウンドスケープのような考え方も入ってきています。環境の捉え方や作品の設置に対する考え方も変わっています。油絵科でも先端・音環をはじめ、それ以外の科ともかかることによって、基礎教育のなかで新たに必要なことが発見されていくし、起ころうのではないでしょうか。

また大学院は、美術学部からは油絵科が一つと壁画が二つの研究室の学生と教官が取手に来ていますが、少ないというのが現状です。先端が大学院の活動を始めて、やはり新しいシステムを考えている。従来の美術学部の大学院は研究室単位で、先生と生徒が密な関係で責任をもつてやっているのが、先端はグループ、プロジェクト制にしているなど、授業の進め方も違います。大学院での研究と実践という点でも、ほかの科や研究室とかかわる場を今後どのようにつくっていく

かが、課題としてあると考えています。

**渡辺** 取手の基礎教育なのですが、先端芸術表現科ができて大きく変わったことは、美術学部にとって必要な幅広い授業科目を多数開設して、ほかの科の学生たちも受講できる体制をとっているところでしょう。先端の開設科目は、基本的に全美術学部生あるいは音楽環境創造科の学生も履修できるようになっています。メディア教育棟が立ち上がり、講義室も整備されましたし、図書館の分室など、大学にとって基本的なインフラがだいぶ充実してきました。

現在、取手校地で一年生において行われている複合選択実技授業は、まだ限られた期間での限定的なものに留まっていますが、さらに多くの科が参加してさまざまな授業展開が図られるようになればいいと思います。早速、音楽環境創造科と先端芸術表現科との間でも共同のプロジェクトや、集中講義や特別講演会の共同開催も随分行われていますね。

かが、課題としてあると考えています。

**渡辺** 取手の基礎教育なのですが、先端芸術表現科ができて大きく変わったことは、美術学部にとって必要な幅広い授業科目を多数開設して、ほかの科の学生たちも受講できる体制をとっているところでしょう。先端の開設科目は、基本的に全美術学部生あるいは音楽環境創造科の学生も履修できるようになっています。メディア教育棟が立ち上がり、講義室も整備されましたし、図書館の分室など、大学にとって基本的なインフラがだいぶ充実してきました。

現在、取手校地で一年生において行われている複合選択実技授業は、まだ限られた期間での限定的なものに留まっていますが、さらに多くの科が参加してさまざまな授業展開が図られるようになればいいと思います。早速、音楽環境創造科と先端芸術表現科との間でも共同のプロジェクトや、集中講義や特別講演会の共同開催も随分行われていますね。

## 上野との距離

**小山** 取手に一年生が入ると、慣れない環境であっても、工房もあるし先端開設の新しい授業があるので、大変刺激的であると思うのです。意外と自立的にいろいろな所へ出かけていく学生が多いのです。ところが、二年になつて上野に移ると、今度は上野の一年生で、自分の場所がない。なおかつ一部大学院生以外は、取手には上級生がいなかつたのに、上野は上級生たちが主体で活動している場ではやれない。実際に、上野に移ると、学生の作品が実際のスケールだけでなく少し小さくなってしまうという印象があります。

**渡辺** 取手でもいろいろな授業が開設されていて、上野の学生も受講することはできるのです。ただ、この距離というのはいかんともしがたくて、上野との有機的、あるいは発展的な関係はなかなか難しい。

**西岡** 音環では、学生が金曜日に上野で授業がとれるようにしたのですが、随分受講しています。音楽学部の場合、副科という専門と違う楽器のレッスンを受けられるのですが、取手では無理なので、上野で受けられるようにしています。でもまだ全体的にはうまく交流はできていないので、大きな課題だと思います。

**渡辺** 先端も音環も四年間ずっと取手なので、上野へのあこがれみたいなものがあるようです。一、二年生の間は、こち

らで授業がかなり密に組まれていていますが、上級生になると上野で開設されている授業を積極的にとりに行くようになる。だから上野のほうでも、取手で行っていることに継続的な関心をもつて、こちらに来てもらえるようにアピールしていく必要があると思います。

**小山** 先端がてきて、新しい先生が一時にそれまでと違うやり方で授業を始めたことで、私たちも、いろいろな試み方があるものだとしました。ただ、一年生担当の取手のなかはともかく、上野の上級生までやろうとするのは、少し無理がある。そこで、基礎教育を一、二年を通して取手でやるとか、共通で基礎授業を考案出して、先端や音環がほかの科と交流する授業をできたらいいのではないかと考えます。

**飯野** 一年生を取手に展開させるにあたっては、逆にこの地の利をうまく利用して、気持ちをリラックスさせて、それを上野に持つていければいいんですけど、また向こうで上野の一年生という形になると、うまくつながっているかわからなっています。一年間我慢すれば上野に行ける、といった腰掛け的に思つていてる学生もいるかもしれません。



# 渡辺好明

先端芸術表現科助教授  
1955年兵庫県生まれ  
1980年東京芸術大学美術学部絵画科油画卒業  
1982年東京芸術大学大学院美術研究科壁画研究室修了  
1985～89年DAAD（ドイツ学術交流会）奨学生としてデュッセルドルフ美術アカデミーに留学  
1989年帰国して常勤助手として東京芸術大学に赴任  
1992年絵画科油画／大学院壁画研究室講師  
1999～先端芸術表現科発足に伴い移籍、先端芸術表現科助教授

## 改善・変革のポイント

**改善・変革のポイント**

**渡辺** 美術学部においては全科の一年生が取手に一年間だけ展開する、という方が本当に最善なのかを、改めて見直すべき時期にさしかかっているのかもしれません。科によつては上野で一年生から

始める科があつてもいいだらうし、こちらで一年まで、あるいは場合によつては四年までいられるような体制をとつていふことも考えていいかもしねないです。

**西岡** やはり上野から学生がこちらにたくさん来るような、興味をもつてもらえてるようなものを設定したいと思つています。教官は上野から、応用音楽、音楽文芸、樂理科や声楽科から毎週常勤の先生に来てもらつており、取手の発展を意識してもらえるようになりました。また大学院についても、音楽学部として取手で大きく展開できるようなことがあるのではないかと話し合つています。

**小山** また、別の捉え方ですが、一年生で複合授業を一緒にやるのは、それぞれの科に基盤教育として独自にやつておかなければならぬことが多いあつてなかなか難しい面があるという意見も聞いています。大学院レベルなら、相当な程度自分たちでやっていけるので、ジャンルを越えた活動ができるかもしれません。

**渡辺** 現時点ではやはり一年生の展開がありますから、大学院の取手への展開というのは非常に限られた範囲でしかないのです。むしろ軸足を大学院に移して、大学院がこちらにもつと積極的に展開できるようないく体制に変えていくことを考えられます。

**飯野** 工房には大学院生もずいぶん来ていまして、例えば铸造工房に彫刻が行くとか、石材工房に行くという形で、年間利用者数というのは相当多いです。ほかには二工房だけですが、九月に公

近辺に住む二〇歳から八五歳くらいまでの人たちが、各工房二〇名くらい集まつて、一週間ほど受講されていきます。工房によつては、そのような公開の仕方、地域との関わりあい方も大いにできるかと思います。

## 地域との取り組みについて

**渡辺** 「取手アートプロジェクト」は今年で五回目になりますが、その背景としては「取手校地創作展」（二〇〇三年から「アートパス取手」と改名）という一種のオープンキャンパスによる展覧会が十年以上にわたつて毎年行われて来たことがあります。いずれもここで行われている創作活動を地域の人たちや社会に向けて発信し、広げていこうという発想に基づいています。とりわけ「取手アートプロジェクト」では、大学を外に向かつて開いていくだけではなく、地域の人々とともに考え、つくつしていく姿勢を鮮明に打ち出することで、芸大に対する、あるいは芸術に対する関心を広く呼び覚ましていきたいということです。同時に、こうした活動の積み重ねによつてアーティスト、表現者が定住していく地域創造につながつていけばと思うのです。

また、取手アートプロジェクトの企画として隔年で行われている「オープンスタジオ」では、取手在住の郷土作家や芸大関係の卒業生たちが、どんな制作場所でどうすることを考えて制作しているのかを、近隣の人たちにも知つていただく機会にしたい。実際に「こんな狭いところで制作しているんだつたら、うちの納屋を貸してあげよう」という話になつていけば、それが呼び水になつて、ここに住むアーティストが増えていくわけです。

**小山** ある種のレジデンスのように、例えは取手市内にある空いている場所を集めることによつて初めて生まれてくる

# 小山穂太郎



絵画科油画研究室助教授  
1955年東京生まれ  
1982年東京芸術大学美術学部絵画科油画専攻卒業  
1984年東京芸術大学大学院美術研究科絵画専攻修了  
1987年同大学院博士課程満期退学  
1994～96年フランス（パリ）滞在（文化庁芸術在外研修員）  
1996～99年東京芸術大学美術学部非常勤講師  
1999年～東京芸術大学美術学部助教授

海外では、公共の建物をつくつたときには、アーティストがスタジオとして使える場所を用意するケースもあるそうです。すると、若いアーティストが経済的に大変な時期に制作に専念できる場ができる。日本にはないわけですが、取手市に始まり、それが広がつていけばいいと思います。実際に壁画の工藤先生も取手市に提案して、実現を目指して働きかけています。単に場所というメリットだけではなくて、同時にオープンスタジオや、そのほかに公共的なものもかかわるような美術の活動があれば、芸大の活動 자체も広がるのではないかと思う。

**渡辺** 上野のようにかなりの歴史を持つた場所ではなくて、取手という手つかずの土地に芸大が来た意味は大きいかもしません。アーティストなるものが大勢集まることによつて初めて生まれてくる

可能性があると思う。そのため、われわれのプレゼンスというのは、市民に対していろいろな形でアピールしていかなければいけないし、一緒にいろいろ話しあわせていく機会を積極的にもたないといけないのでしょうか。

キャンパス内で行われている公開講座や、ゲストをお呼びして行う講演会、あるいは学生が仕掛けているイベントがかなりあり、学内の人たちだけではなくて、一般の方にもぜひ来ていただきたいと思っています。例えば取手の駅前に、芸大でのイベントを告知できるように広報窓口や掲示板などを置けば、随分関心をもつてくださるのではないか。

飯野 公開講座は地域の人にとって、年一回の楽しみなのです。ここできつかけをつかんだ方が市の援助や近隣の協力をいただきながら、拠点が増えていけばいいと思います。取手近辺の人と協力し合って、説明して積極的にそういう方向に動いていただけるようにしたいのです。

## 大学院の展開

**西岡** 平成十八年度には音楽環境創造科の大学院ができる予定です。単独の音楽環境創造科でできることより、もっと大きな可能性を秘めた大学院というのを、今構想しているわけです。例えばCOEにも対応できるような大きな視点が今の大には求められていますので、そういうことも見据えて考えられるような組織ができるだろうか。それから、上野は手狭で場所がありませんので、上野でできなかつたような設備をこちらに置いて、しかも世の中と直接接点があるようなものがこちらでできれば、現在構想中です。

渡辺 昨年から先端でも大学院ができました。学部との单なる連動性だけでなく、本学の他科の大学院や他大学とも積極的な関係を築いていくことが重要になるでしょう。単にエスカレーターで学部から上げていくだけではなく、多彩な顔ぶれの教官に対して、大学院ならではという

幅広いジャンルから改めて人材を集めることによって、新たに生まれてくる可能性を見ていきたいと思います。

大学院の今後を考えいくことは、まさにこの取手校地が上野に対してどう特

色を出していけるか、COEの話が出ましたが、新しく形で受け皿になつたけれども、新しい形で受け皿になつたことと密接に結びついた課題だと

いえるでしょう。

**小山** 取手の利点として、制作には十分な場所があつて工房も充実しているのですが、それだけで終わつてはいる部分があつたと思います。それに対して上野は、美術館やギャラリー、そのほかにもいろいろな活動をしている場所に出かけて行くには、非常に便利です。取手のなかに、ほかとかかわりいろいろな人も集まる場所が今後作れるかどうか、課題でしょうね。

また、取手ではもつと複合授業を基礎教育でやればいいですし、大学院での授業もリンクさせるような形をとるとうまくつながってくると思います。今までの芸大の横並びでみんなが一緒に行う状況を考え直して。取手の特性、各科の特性を生かして、いろいろな活動があちこちから出るようなシステムを持つたほうがいいと思います。

**飯野** ここが独立採算ですべてできるために、一年から大学院まで展開していく科を中心にして充実させて、取手校地をリードしていくような形にならなければいけないでしょう。工房はそれをフ

オローしていく形で、上野にはない大型のものを扱っているわけですから、自分である程度技術も知つて、造形力もその素材も知つた人たちが展開してくれればいちばん活躍できる場だと思います。

渡辺

いざれにしましても取手の発展というのは、上野と違う形をいかにここで新鮮に打ち出せるかにかかっていると思います。そのためには、今までの経緯はさておき、独自の展開を図り、さまざまな挑戦や実験を重ねていくことが重要だと思います。上野での両学部、各科の利害や、音楽や美術というジャンルやカテゴリーを超えて、取手ならではの形をいかにみんなで知恵を出し合つてつくつて思ひます。本当に意味での複合的、横断的な展開を、斬新な形で行つていくこと、私はそこに期待したいと思つています。

# 西岡龍彦



にじおか・たつひこ

音楽環境創造科教授  
1952年大阪生まれ  
1975年東京芸術大学音楽学部作曲科卒業  
1977年東京芸術大学大学院音楽研究科作曲課程修了  
1984年桐朋学園大学音楽学部非常勤講師  
1991年東京芸術大学音楽学部非常勤講師  
1998~2002年洗足学園大学音楽学部助教授  
2002年~東京芸術大学音楽学部教授

**渡辺** 活動の拠点としては、上野であり取手であるでしょうか。どちらも、かかわっていく対象は別に取手や上野ではないわけです。活動の場所はある意味では世界中なわけで、そういう積極的な発信の拠点として、取手が上野とは異なった独自

の視点から国際的にアピールしうるものを持ち出していくか、というところにかかっていると思います。その可能性は十分にあるのではないか。

**西岡** 音楽環境創造科は、防音設備のないメディア教育棟のなかで学科が活動しているので、音の問題があります。広い取手校地には、のびのびと音が出せる可

能性があるわけですから、学生のためのよい施設ができれば、上野との距離も非常に近くなります。

**飯野** ここが独立採算ですべてできるためには、一年から大学院まで展開していく科を中心にして充実させて、取手校地をリードしていくような形にならなければいけないでしょう。工房はそれをフ

ボーダーレス化が進む芸術の状況を踏まえて  
取手校地に新設されたオリジナリティ溢れる二つの学科。

# 学科紹介

## 先端芸術表現科

藤幡正樹

先端芸術表現科も、設置以来五年の歳月を経て、平成十五年度には大学院がスタートし、創作活動面でも研究活動面でも、いよいよ生産的な時期に入ってきた。

この一月には二期生の卒業制作展示が、「Project the Projects」と名付けられ、都内新橋の旧桜川小学校で開かれた。展覧会は、場所の選定から展示の実現、カタログの制作まで、教官側はほとんどなどにも手伝うことなく、すべて四年生が実現した。これは、展示を実現する学生達自らのことを「プロジェクトを行なう者＝プロジェクトラー」と呼ぼうという考え方から始まつたのであり、作品一点一点の質もさることながら、運営実現の手法としても評価できるものであり、場を作るところから始めることを提唱してきた、この学科の方針に沿ったものであつた。

また、大学院では個人制作はもちろんのこととして、むしろ個人の能力を超えた知識や画廊や美術館があるから美学のあるのではなく、自分たちの吸収や、個人では不可能なサイズのプロジェクトの実現

へむけた「授業」として、「素材と創造性」「コミュニケーション・デザイン」「地域と芸術」「言語と身体」「科学技術と表現」といった五つの領域分野が設置されている。学生は、これらの領域と接点を持つことで、個人の制作とは多少違った角度から、自分の立場を客観的に再確認してほしいのだ。また、多くの教官がこれらの領域にまたがって活動しており、教官にとてもほかの教官と共にで運営していく領域分野の活動は、

次第に大学院らしい充実したものとなつてきていている。

四年生の学外での卒業展が「プロジェクトーズ」と名付けられたように、この学科では作品制作というよりも、プロジェクトという活動に重点がおかれ、対象を取り込もうとする造形的なアプローチよりも、表現によって対象を知り、表現によってアプローチに焦点を充てたカリキュラムを考えてきた。その背後には、額縁や画廊や美術館があるから美学があるのではなく、自分たちにどつて必要な世界を切り

開いていくための美術とは何か、について考えていきたいと思うからである。未来に向かってどのように生きていくべきか辛辣に考えれば、美術場所ではないことがわかるはずであり、それが危機的な状況にあることも理解されるはずである（このあたりの議論は、昨年出版した『先端芸術宣言！』（岩波書店刊行）に収録しているのでぜひ、参考していただきたい）。

こここのところ、学科関連の展示が相次いでいる。取手では「素材と創造性」のメンバーの展示が開かれており、三月には別の領域の学外展示も開かれることになつて。それぞれが異なるスタンスで、異なるアプローチで活動をしており、それらが常にルーチン化されることなく、行なわれているのも、この学科の特徴といえるだろう。

（ふじはた・まさき／美術学部先端芸術表現科教授）



右：IMA演習。長谷川祐子講師  
上：IMA演習。西條朋行講師



# 音楽環境創造科

熊倉純子



上：ディーン・モス客員教授による舞台映像論の講義  
風景  
左：熊倉純子助教授による映像基礎演習



平成十四年四月に新設された音楽環境創造科は、音楽学部では初めて取手校地に拠点を置く学科である。ちなみに、音楽学部にとつて新学科の設置は約五十年ぶりのことだ。

学科が設定している目標は、  
①映像、身体表現、先端的テクノロジーと結びついた音楽表現の可能性の追求。②音楽・音響・美術・映像・舞台芸術などのさまざまな領域にまたがる知識と感性を備えた人材の育成。③芸術と社会のかかわりについての総合的な考察、および新たな音楽環境・文化環境の創造。——表現領域は広範におよぶが、要是「つくり手」と「つなぎ手」が共存・協働する場となり、学生が両者の視点をあわせもつようになることを目指している。

現在在籍している学生は、一期生二〇人と二期生二十一人の四一人。年次進行でカリキュラムもスタッフも発展途上だが、今は専任教官四人と非常勤助手五人、学生も教官もスタッフも多彩なバックグラウンドをもつ人々が集まつて試行錯誤を続けている。

リキュラムの中核を成すのは「プロジェクト」という実践授業で、このなかで学生は共同作業を行ない、企画・制作・運営能力を養うことになる。一昨年は、六月に行なわれたメディア教育棟の竣工記念式典の際、学科のお披露目を兼ねた「音の環」プロジェクトを実施し、空間、映像、メディア、身体などとさまざ

まに絡む音表現を展開したが、入試では芸術的技能を試す実技試験は課していない。セミナー試験と小論文によつて学力と論理性が問われる一次試験で数が絞られた受験生は、二次試験の面接で演奏・パフォーマンス・プレゼンテーションのいずれかの形で自己表現を行ない、創造性、企画力、コミュニケーション能力などをアピールする。技術も芸術の専門知識も問わないと、

入学時には一般大学の学生と変わらぬ芸術観をもつた学生が多いのもこの学科の特徴だが、社会的バランス感覚に富む彼らは、学科にとって非常に貴重な人材である。また、経験者も入学している。

これまでには毎年数名の社会人多様な領域をカバーする力が、社会的バランス感覚に富む彼らは、学科にとって非常に貴重な人材である。また、経験者も入学している。

これまでには毎年数名の社会人多様な領域をカバーする力が、社会的バランス感覚に富む彼らは、学科にとって非常に貴重な人材である。また、経験者も入学している。

今後も、音楽と美術、取手と上野、芸大と社会の結節点となるべくフィールドワークを続ける音楽環境創造科だが、われわれのアプローチに、ぜひ多くの方のご協力をお願いしたい。

（くまくら・すみこ／音楽環境創造科助教授）

# 取手キャンパスを歩く

## 1 美術学部共通工房

取手校地自慢の共通工房は6つの工房で構成されています。金属工房の3工房（金属機械室・鋳造室・金属表面処理室）、木材造形工房、塗装造形工房（化学塗装・漆）、石材工房。

卒業・修了制作のための大型作品の加工にも対応した設備で、非常勤講師が指導にあたっています。使用は申し込み制になっています。



美術学部3年生がブロンズの流し込み作業を行っているところ。



敷地面積164,095平方メートル、

1991年(平成3)10月4日に開設された広大な取手校地。

豊かな自然のなかに先端的な施設が展開するキャンパスの隅々を、田中一幸前工房長がガイドする。

取手校地には、美術学部の共通工房を中心に、先端芸術表現科のメディア教育棟も完成して、現在、音楽棟が建つまでの間共用している美術学部（絵画・彫刻・工芸・デザイン・建築の各科）1年生と先端芸術表現科、平成14年に新設された音楽学部音楽環境創造科に加え、平成15年度には大学院美術研究科先端芸術表現専攻が設置されました。利根川河川敷の地形を生かして建てられた様々な施設をみていきましょう。

## 案内人・田中一幸

たなか・いっこう

工芸科木工研究室教授  
(前・美術学部共通工房工房長)

1943年神奈川県生まれ

1967年東京芸術大学美術学部工芸科卒業 70年東京芸術大学大学院美術研究科鑄金専攻修了 1986～89年東京芸術大学美術学部講師 90～99年助教授 2000年～東京芸術大学美術学部教授



## 4 美術学部登窯

取手校地のなかでも最も古い施設で、開設前の1989年、東北大工学部と共同して研究した時に初めて使われました。山の傾斜を生かした、登り窯としてふさわしい場所に設けられています。現在では年に数回使用していて、最近では市民に開放することもあります。



## 5 野外制作場

陶芸専攻の大学院1年生が、築窯実験をする場所です。



キャンパスのなかには、絵画科（日本画）が使う和紙の原料になるコウゾ（楮）、ミツマタ（三桠）や、漆芸に用いる漆の木が植えられています。



〒302-0001  
茨城県取手市小文間5000番  
地 電話0297-73-9111  
(事務室)  
JR常磐線取手駅東口から  
大利根交通バスで約15分  
(約5.9km)、「東京芸術大学  
前」下車



取手校地の開設式典にあわせて建立された記念碑「理想」。平山学長の揮毫です。



### 8 大学美術館取手館

平成6年8月に竣工し、建設当初は芸術資料館取手館と呼んでいました。収蔵が中心ですが、展示スペースを増築予定です。把手のデザインは澄川前学長によるなど、美術学部の教官の作品で飾られています。設計は六角鬼丈教授です。

### 6 7 短期学生宿泊施設・福利施設

食堂や購買部のほか、集中して作業する学生のために、宿泊設備も設けられています。



P

### 2 3 メディア教育棟・専門教育棟

メディア教育棟は2001年の10月に第Ⅰ期、翌02年の6月に第Ⅱ期が竣工した、芸大の新しい顔ともいえる建物です。美術学部先端芸術表現科と音楽学部音楽環境創造科の教官室や講義室を中心に、附属図書館の分室のほか、インターメディアスタジオ、仮想現実感スタジオ、音楽プロジェクトルームなど先端的な設備をもった施設が入っています。



5階のパレコニーから見た利根川。

# NEWS 2003.11～ 2004.2

## 何が変わらるのか 「大学法人化」

ここ十年あまり、行政改革をはじめとして各界のさまざまな分野で改革が行われています。高等教育分野においても、臨時教育審議会や大学審議会等で大学改革に関する審議が行われてきましたが、国立大学の法人化が本格的に検討の対象となつたのは、平成十一年四月に「国立大学の独立行政法人化について」は、大学の自主性を尊重しつつ、大学改革の一環として検討し、平成十五年までに結論を得る」と閣議決定されたことによります。

その後、法人化スケジュールは前倒しとなり、当初予定より若干早く、昨年七月国立大学法人法が成立し、今年四月より国立大学は国立大学法人となります。芸大も国立大学法人東京藝術大学として新しく出発いたします。

法人化というと、民営化するのかという疑問をお持ちになるかもしませんが、そうでありません。予算は今までと同じように、運営費交付金という形で国から支給されます。では何が変わるかといふと、まず運営組織



◎鈴木薰

### 受 章・受 賞

◆文化勲章、本学教授を歴任した二名が受賞

平成十五年十一月二日、日本画家の加

### 交 流

◆パキスタン・国立ラホール芸術大学との交流に関する懇談

十月一日、学長室において、パキスタンの国立ラホール芸術大学長サイド・ヴァンダル (Sajida Vandal) 女史と

平山郁夫学長ほか五名が、本学と国立ラホール芸術大学との交流及び交流協定締結に関して懇談した。

昨年三月、日本とパキスタン国交樹立五十周年記念式典がパキスタンで開催された際、学長同士による交流に関する意見交換を行い、この度、本学の招へいに

より学長ほか一名が本学を訪問することになったもので、十一月二十九日から

十一月四日までの滞在中、本学関係教官との懇談や施設等の視察並びに国際交流基調訪問や都内美術館等を視察した。

◆音楽学部学生と中学生が奏楽堂で共演

本学音楽学部が地域交流を図る目的で始めた御徒町台東中との合同演奏会は、今年で二回目。芸大生による指導と練習を重ねた中学生と音楽学部学生の演奏に對して、会場を埋めた聴衆から惜しみない拍手が寄せられた。入場者数は八〇〇人。音楽学部では、この事業に八二名の教官・学生が指導にあつた。当団は四九名の学生と約六〇名の中学生が演奏に参加した。

### 運 営

◆音楽学部六教官退官記念演奏会を開催

一月十九日、重要無形文化財絵図指定保持者の野村四郎教授（能樂）が、学内能ホールにおいて退官記念演奏会を開催した。また、昨年十一月九日に有賀誠

山又造名譽教授と詩人で元音楽学部教授の大岡信氏が文化勲章を受章された。

◆中林忠良教授が紫綬褒章を受章

平成十五年秋の褒章において、本学絵画科の中林忠良教授（銅版画）が紫綬褒章を受章された。

◆平山郁夫学長が朝日賞を受賞

一月一日、平山郁夫学長が、画家としての長年の業績と、文化遺産保存への国際的貢献に対して、二〇〇三年度の朝日賞（財団法人 朝日新聞文化財団主催）を受賞した。

◆中西夏之氏が毎日芸術賞を受賞

一月一日、昨年二月に退官した中西夏之元美術学部教授（油画）が、特に優れた芸術的成果を上げた個人・団体に贈られる第四五回毎日芸術賞（03年度／毎日新聞社主催）を受賞した。

### 運 営

◆音楽学部六教官退官記念演奏会を開催

一月十九日、重要無形文化財絵図指定保持者の野村四郎教授（能樂）が、学内能ホールにおいて退官記念演奏会を開催した。また、昨年十一月九日に有賀誠

大学評価学位授与機構等によって評価され、その結果によってそれ以後の運営費交付金の額が決定されます。

ただし、文部科学大臣が中期目標を示すとはいっても、大臣が実際に全ての大学についての目標を決められるわけではありません。また、それでは各大学の独自性が活かされず、自律・独立性が損なわれることになりかねません。そのため、各国立大学法人がそれぞれ中期目標についての意見を述べ、それに基づいて文部科学大臣が中期目標を決定するところとなっています。なお、中期目標・中期計画策定にあたっては、国立大学法人評議会が文部科学大臣に意見を述べることとされています。

大学運営に必要な資金は運営費交付金の他、教育研究に関連した事柄であれば、大学独自の資産を活用した事業収入を資金とすることが可能となります。授業料・検定料のほか、芸大でいえば美術館や奏楽室の展覧会・演奏会収入等も今まで国庫金として国に納めていたのが、大学の収入として直接活用できることとなります。従来、大学予算は、大学の規模に応じて配分され、特別な事柄は必要に応じて申請する仕組みでしたが、今後は、運営費交付金としてひとくくりされた渡し切り費になるので、それ以上の事業のために、産学連携といった外部資金導入など、大学が積極的に資金を獲得することが必要となつてきます。会計システムも、民間企業と同じ企業会計システムとなり、予算の使い道に今までのような使途区分による縛りがなくなる反面、経常経費削減など、より効率的な経営が求められます。

教職員の身分ですが、国立大学法人の職員として公務員ではなくなります。公務員でなくなりことによって、学長に外国人を迎えることや、兼業規制の緩和等が可能となる反面、今までのような身分保障はなくなり、雇用者と労働者という関係になります。非公務員化に伴い、適用される法律が変わるために、就業規則や安全衛生規則などの諸規則も整備しなければなりません。芸大においては、教員も今までのように単なる終身雇用ではなく、一定の期間ごとに業績が評価されるようになります。

芸大で学ぶ志を持った人にとって最も関心のある入学料・授業料ですが、来年度は変わりません。ただし、検定料については引き上げの方向で検討されています。なお、入学料・授業料は今まで毎年交互に引き上げられてきましたが、今後どのようにするか、引き続き検討を行ってきます。

法人化は、国立大学にとって新制大学発足以来の大変革です。学生にとって、すぐに目に見えるような大きな変化はないとはいいえ、法人化は芸大にとり未知数のことが数多くあります。運営費交付金も、一定程度は削減されてしまうのではないかともいわれています。法案成立後の準備期間も極めて短く、教職員には今までの発想を切り替えて、一体となって運営に当たる覚悟が必要でしょう。しかし、法人化を契機として、芸大は今まで以上に芸術文化伝承と創造の拠点として飛躍していくことを決意しています。

[注記] (註)各国立大学の中期目標の案は文部科学省のホームページで見れます。  
[http://www.next.go.jp/a\\_menu/koutouhujin/index.htm](http://www.next.go.jp/a_menu/koutouhujin/index.htm)

門教授（打楽器）が奏楽室で、一月十九日には辛島輝治教授（ピアノ）が学内第六ホールにおいてそれぞれ退官記念演奏会を開催。さらに、三月二十一日には、

嶺貢子教授（声楽）、鈴木寛一教授（声楽、實相寺昭雄演奏芸術センター長）の退官記念演奏会が奏楽室で行われる予定。

#### ◆取手アートプロジェクト 2003の開催



◆取手アートプロジェクト  
2003の開催

美術学部先端芸術表現科に加え、今年から大学院美術研究科絵画（壁画）専攻や音楽学部音楽環境創造科の学生がこのプロジェクトに参加した。

毎年、学生を中心として本学取手校地で開催されている展覧会「創作展」が、今回から「アートバス取手」と名称を変更して、十一月三日～七日（一般公開十一月五日～七日）まで行われた。

従来の「創作」の文字ではおさまりきらなくなつた、さまざま表現、“path”といふ言葉が、小道、踏み跡、進路、軌道、方針といった広くどうそられる意味合いを持つており、芸大取手校地を表現するのに適切として変更された。

#### ◆實相寺演奏芸術センター長、監督の立場から講演

一月二十九日、附属図書館閲覧室において、演奏芸術センター教授で實相寺昭雄同センター長が、「私と藝術～ウルトラマンの監督から～」と題して、講演を行った。上野沿道附属図書館長が、美術音楽両楽部と共に通ずる映像分野にスポットをあて、学生、一般向けに企画したもので、本学図書館では初の試み。

實相寺センター長は、「ウルトラマン」、「ウルトラセブン」や、「無常」「帝都物語」などを鑑賞し、舞台オペラ演出著作などでも活躍中。

講演後の質疑応答では、撮影の裏話を交えたユーモアあふれる語りで答へ、会場を埋めた聴衆から割れんばかりの拍手を受けていた。

講演後、前回「タイムカプセルに乗った芸大」第7回挿圖キヤブショウに譲りがありましたので、訂正をお読み申上げます。

「穂田一穂（穂）→蓮屋辰雄（辰）」

七 この第八回は、一九七一年から始まる十年の号である。この一九七〇年代は、旧校舎の相次ぐ改築で、学内景観が一変した時期だった。ただ、そのポイントは一九七〇年に始まったため、そこから話を始めることにしたい。

一九七〇年一月、美術学部内の北西端に、地上八階建ての高層棟が突然現された。油画と日本画が入った絵画棟(①)である。まだ木造校舎のこじていた校内の風景は、どこからでも見えるこの建物の出現で、大きく変わった。いまでもこの絵画棟は、上野校地の最高峰だ。ただでも周囲より少し高い上野の山にあるから、よけい高い。上層階から見える景色は絶景で、とくに夜景は、高級ホテルのラウンジなみ。いまはやりの夜景がウリの高級マンションでもいけそうだ。でも専門棟だから、見られるのはその人だけ。うらやましい。私のいるすぐ

### 東京芸術大学美術学部1970年 学内景観の一変 相次ぐ改築

佐藤道信

日本近代美術史。主要著書『〈日本美術〉誕生—近代日本の「ことば」と戦略』『明治国家と近代美術—美の政治学』



美術学部全景（2001年）

となりの四階建ての建物は、ここから見るとずくழつているようだ、悲しい。

震災と戦災をまぬがれてきた戦前からの校舎も、戦後になると、さすがに老朽化が目立ちはじめた。一九五三年から始まった改築計画で、六〇年代にまず工芸棟(六年、③)と附属図書館・芸術資料館(六年五年、⑥⑦)が完成。音楽学部の改築も、この頃から始まった。そして七〇年代に入ると、美術学部の旧校舎の改築がいつせいに始まる。この十年間は、いつもどこかで工事をしている状態だったが、ここで現在にいたる学内景観ができるのである。

絵画棟につづいて、翌七一年に彫刻棟(②)、七四年に中央棟(⑤)、七九年にデザイン棟(④)が完成。音楽学部内の大学会館(七九年)や事務局棟(本部、七八年)、奈良の古美術研究施設(七年)、石神井学生寮(七年)なども、すべてこの時期につくられたものだ。いまの中央棟から彫刻棟にかけての場所には、東京美術学校時代からの本館があった。この建物が取り壊されるときには、卒業生の有志による「本館にさよならする会」が開かれ

た。全国から約一〇〇〇人におよぶ教官、同窓生が集まつたという。その際、せめて玄関だけでも残そうとなつて移築されたのが、いま陳列館(⑧)と正木記念館(⑨)のあいだにある旧玄関である。

美術学部の各科の棟は、敷地内をぐるりと取り囲もうに配置されている。超高層がブームになった当時、絵画棟のほかの建物も、高層になるかと思われた。が、そろはならなかつた。高さ十五メートル制限の公園法があつたからである。絵画棟の場所は、学校の敷地内ではあつたが、公園の外だつたらしい。戦後は、大学院の新設による学生数の増加、作品の大型化などで、学内スペースは狭くなる一方だつた。それを高層化でクリアできなかつたことが、のちの取手校地の開設(九一年)につながつていく。

そして、こうして建てられた建物も三十年がたち、いま再び改築の時期を迎えている。大学美術館の新設(九年、⑩)、総合芸術棟への改築(〇四年)など、学内景観もまた二十一世の姿に変わりつつあるのだ。

(せとう・じゅしん／美術学部美術学科助教授)



美術学部構内  
①美術学部絵画棟  
②彫刻棟  
③金工棟  
④工芸・デザイン・建築棟  
⑤中央棟  
⑥附属図書館  
⑦旧芸術資料館  
⑧陳列館  
⑨正木記念館  
⑩大学美術館  
⑪第1守衛所  
(2003年度東京芸術大学概要より)

# タイムカプセルに乗つ

100

このつした収集品の最初の展示会は、大正五年（一九一六年）十一月に行われ、期間中の十一月十六日には、「皇后啓演奏会」が催された。当時、音楽学校の学友会が発行していた雑誌『音楽』によると、生徒たちが「君が代」を合唱するなか、皇后陛下は「玉座」に着かれ、第一部の幕が開いた。「早春賦」の作曲者として知られる中田章のオルガンの独奏に始まって、長坂好子はソプラノ独唱、のちに悲劇的運命をたどった久野ひさ子はピアノ独奏、信時潔はルーピンスタイルのチェロ・ソナタを演奏している。その第一部終了後、第二部が始まるまでの休憩時間に皇后陛下は、「湯原校長の御先導にて新館に玉歩を運ばせ給ひ」、別棟で催されていた楽器展をご覧になつた。展示会の詳細は、記録が消失していく不明だが、このときの展示品は楽器だけはなかつた。雅楽、能楽、声明などの古文書も含めていた。

東京芸術大学音楽学部はその前身である東京音楽学校時代から数えて、創立九〇周年を迎えた。この記念の年の大きな行事の一つに、十月一日から三十日まで開催された「楽器展－東洋の音・西洋の音－」があつた。選ばれた楽器は、その頃の教授陣の専門分野を反映して、興味深い。バロック時代の楽器、ヴィオラ・ダ・モードは、ヴィオラ専門の浅妻文樹教授の発案であつた。トランペッタの中山富士雄教授は、ルネサンスやバロック期の管楽器を担当された。傑出したフルーティストであった吉田雅夫教授は、一八世紀から二〇世紀までのフルートの歴史がわかるように、クヴァント・モーテルの一鍵のものからベーム式のものまで体系的に示された。アジア・アフリカにフォーカスをあてたのは、民族音楽研究の代名詞ともなつていた小泉又夫教授である。

東京音楽学校では、明治二十年（一八八七）の創立以来、教材としてあるいは貴重な歴史資料として、楽器を購入している。その孜々たる努力によって、現在で質と量とともに充実したコレクションができる上がつてゐる。



「東京藝術大学創立90周年記念 楽器展」(展示目録)

インドネシアのジャワ島西部のチター属の楽器カチャップ・インドゥンとカツチャビ・リンチや打弦楽器のチャレンパンが、和琴、楽箏、八雲箏、せんには中国のやugiの「奏楽器」として一つのグループにされた。また、いわゆる「ビルマの豊饒」サウンガウは、東アフリカとアフガニスタンのハープと比較できるように陳列された。北インドのシタールやサー・ランギーは、「共鳴弦を持つ弦楽器」として、ヴィオラ・ダ・モードと同じコーナーに並べられた。

このように、創立九〇周年を記念した楽器展では、西洋器とアジア・アフリカの楽器が、グローバルな視野で取り上げられたのである。それは、古典主義以降のヨーロッパ音楽を機軸とした音楽觀が相対化され、さらにヨーロッパ音楽の絶対性が世界的に崩れはじめたプロセスのあらわれであつたかもしれない。

(たきい・けいこ／演奏芸術センター助手)

## 東京芸術大学音楽学部1977年 芸大創立90周年 記念「楽器展」

瀧井敬子

音楽学（ドイツロマン派、および日本洋楽草創期の研究）。主要論文「F・ダーフィトのエストニア時代」、著書『漱石が聴いたベートーベン』



左：サーランギー  
右：「ビルマの豊饒」サウンガウ

# 開かれた大学

8

学生オーケストラ

別府アルゲリッチ音楽祭、「芸大シンフォニア」英國公演など世界が注目する舞台での演奏機会が増える学生オーケストラの活動

## 海外へ地方へ、活躍の場が広がる

有賀誠門

このところ学生オーケストラの活躍が目覚ましい。何といっても二〇〇一年、第三回別府アルゲリッチ音楽祭事務局から出演協力依頼を受け、参加したのが一因だと思われます。この音楽祭は国際的に認知されたものであり、参加できたことは大きな意義がありました。この音楽祭に第一回目から関係されている清水高師先生が、ぜひ芸大の学生たちに世界一流の芸術家と協演させたい、その体験こそが演奏家にとって何より大切だ、という思いを提案されたことからはじまりました。

参加するにあたって賛否がありましたが、ようやく「東京藝術大学別府アルゲリッチ音楽祭特別オーケストラ」という名のもとに出演する方向に動きだしました。随行教官として、有賀誠門、杉木峯夫、永島義男、事務官一人が同行。現ロイヤルオペラ劇場音楽監督 A・パッパー氏の指導のもと、シベリウス作曲「交響曲第一番」のリハーサルがはじまる。またたく間に「音楽する」レヴェルがあがり、若い学生諸君の能力が引き出されました。辛辣な評をする斯界の方々から外交辞令でな

く、芸大学生オーケストラがよくやったと本音を聞かせることができました。この音楽祭の総合プロデューサー、伊藤京子氏から、総監督 M・アルゲリッチ女史が、ぜひまた一緒にしたい、と希望しているということから、第四回にも参加。アルゲリッチ、チエロの M・マイスキ、ヴァイオリンの D・シトコヴェツキ、指揮に C・デュトワでラヴェル作曲「ピアノ協奏曲」、「展覧会の絵」などを協演。二〇〇三年の第五回にも参加、事情でアルゲリッチの来日はなかつたものの、代役として三日間、来日し大役をはたしたピアニストの F・ブライ、ヴァイオリンの J・ラクリン、チエロの M・マイスキ、指揮 A・パッパーによるベートーヴェン作曲「三重協奏曲」は、はじめの組み合わせであり、一度と聴けない名演でした。しかも五周年記念を祝して東京公演がサントリーホール、芸大奏楽堂の二か所で行われ、ベルリオーズ作曲「幻想交響曲」は記憶に残る演奏でした。

今年、第六回にも出演依頼をいただき、パッパー指揮、マーラー作曲「交響曲第一番」などが



第5回別府アルゲリッチ音楽祭（東京公演）2003年5月10日・東京藝術大学奏楽堂 ©産経新聞社

プログラムの一つとして提案されています。

この別府アルゲリッチ音楽祭のNHKテレビ放映を見て、ぜひ、芸大学生オーケストラの演奏をしてほしいと山形県長井市から出演依頼をいただき、昨年八月はじめ、小林研一郎指揮のもと公演を行いました。地元の方々の力強いサポートをいただき、成功させることができました。今年もぜひひ」という依頼がすでにきいています。

特筆すべきことは、昨年三月下旬、音楽学部をあげて「芸大シンフォニア」が編成され、芸大創立以来初の海外公演が実施されたことです。まさにアメリカ、イギリスによるイラク攻撃がはじまった歴史的な時でした。ロンドン王立音楽院、大英博物館、ケンブリッジ、マンチエスター（北王立音楽院）の四公演が、指揮D・シトゴヴェツキー、マンチエスターでの合同演奏では佐藤功太郎氏が担当、ピアニストは佐藤卓夫（当時音楽学部1年）、ショスタコーヴィッチ作曲「ピアノ

協奏曲」、フレームス作曲「交響曲第一番」を演奏。初の海外公演で芸大のすばらしさを外国の方々に知つていただくことができました。さらに海外へ芸大文化の発信が望まれます。

一九九八年から東京文化会館自主事業の一つ、「学生オーケストラの祭典」にも協力、五回にわたり、桐朋学園大学、東邦音楽大学、東京音楽大学、武蔵野音楽大学と協演、佐藤功太郎、田中良和、小林研一郎氏により東芸芸大の潜在能力の高さを社会に知つていただくことができました。二〇〇三年、「春の祭典」の名演は歴史に残ることでしょう。これも明治以来百余年にわたる前人諸氏の教育実績の賜物であり、常に、この地下水脈が枯れることのないように基盤教育基盤を徹底させ、より深く、高い音楽演奏を常に心がけることが、感性豊かにして元気な社会を創ることになります。東芸芸大はその根幹を握っています。

（あるが・まこと／音楽学部器楽科教授）



山形県長井市の公演。2003年8月



第5回別府アルゲリッチ音楽祭〈別府・大分公演〉2003年5月5日・ビーコンプラザフィルハーモニアホール（大分県別府市）©産経新聞社

# 国際交流会館

芸大には現在、約100名におよぶ外国人が留学してきている。  
彼らの一部が居住する「国際交流会館」はどのような場所なのだろうか。



## 都心から離れた留学生の拠点

趙洗淵

上野から電車で約四〇分。駅からは自転車だつたら五分ぐらいで歩いても十分ぐらいのところに東京芸術大学国際交流会館がある。所在地は千葉県松戸市。私がはじめてここを訪れた時、東京から一時間もかかりないとこなのに、こんな田舎なんだというのが、最初の印象であった。

しかし、実際にここで生活している間に少しずつ私の心は最初のちょっととした不満から、満足、そして感謝の気持ちに変わっていたのである。

その理由はいろいろあるけれども、まずは経済的な面である。多くの留学生が日本に来て最初に直面するのが高い物価である。部屋の家賃をはじめさまざまなお金がかかる。日本の家賃をはじめさまざまな生活費は日本という国に慣れない限り、とっても理解しづらいことである。このようないことを学校側はちゃんと把握しているようだ。だから、ちょうど日本という国を理解するまでの期間を、援助するための施設を作ったのではないかと私は思う。

そしてもう一つは、この会館の場所である。大体の人々は外国に留学をすると、その留学先である学校の周りとか、情報が少ないため大都会で部屋を借りるしかないので現実である。しかしこの会館は上野と取手のまん中ぐらいといふ意味も

あるかもしれないが、都心からかなり離れている。しかも注意して見ると煙や田んぼも見られるところである。世界の人々が持っている日本のイメージは、おそらく経済大国とか最先端技術を持つ工业国家などのが浮かぶだろう。しかし、日本はもともと農業の国であつた。現在も日本の農業生産率は世界トップレベルだと聞いている。ところが、日本という国を学ぶために来ている多くの留学生はこの国の本当の姿をわからずには少し感じられるのである。そして、自分の国と変わらないところが見つかって、この国がもつと近く感じられた瞬間、この国がもつと近く感じられたのである。

毎年十一月ぐらいになると学校側から、この会館に住んでいる留学生と、この地域の住民との交流のため、懇談会を開いている。当然今年も開かれ、私が留学生を代表してこのような話をしたら、この地域の方々も強く共感をしてくださった。その住民の方たちの側からみると、このような施設はむしろ迷惑な存在かもしれない。それにもかかわらず、皆自分たちの町にこの会館があることを喜んでいただけ、あたたかい笑顔で、「お勉強頑張ってくださいね」と言ってくれた。もはやここは留学生と日本人をつなげてくれる



る立派な一つの通路になつたこと

実感したのである。

私は今、厳しい状況のなかで自分の夢に向かって一所懸命に努力している。しかも私は妻と子のある家庭を持っている立場である。それで時々、「このよつた施設がなかつたがどうなつたんだろう」と思ひながら改めて感謝の気持ちを持つようになる。

(ちよつ・せよん／大学院美術研究科  
ザイン専攻二年)



国際交流会館  
〒270-1034 千葉県松戸市新松戸7-376  
(上野駅から約1時間10分)  
※JR常磐線「新松戸駅」下車徒歩20分  
※JR武蔵野線「南流山駅」下車徒歩8分

黒田清輝「婦人像（厨房）」1892年（明治25）、本学蔵



右：高橋由一「鮓」1877年  
(明治10) 塙、本学蔵  
左：狩野芳崖「悲母觀音」  
1888年(明治21)、本学蔵

「再考：近現代日本の絵画 美意識の形成とその展開」  
—Remaking Modernism in Japan 1900-2000—

野口玲一

自分たちがたどってきた軌跡を見直す

大正美術館において、東京都現代美術館・セゾン現代美術館と共に「再考：近現代日本の絵画」展を開催します。この展覧会は、明治期から今日にいたる日本の美術において、特に絵画に焦点を絞つて回顧しようとしたものです。

日本にとって二十世紀は近代化の世紀といえます。一九世紀後半に成立した明治政府は、困難なプロセスを経てあらゆる社会機構の近代化を進めました。美術についてもその例にもれません。工芸など伝統的な技術が保護される一方で、油

画の手法や彫刻の概念が導入され、美術のジャンルが再編成されました。この動きのなかで伝統的な書画から書が切り離され、絵画が独立します。作品や作家をとりまく環境も大きく変わりました。博覧会や展覧会において作品が鑑賞されるようになり、作家によって画壇が組織されます。

近代化は一面では歐米化といえますが、それが進められると同時に美術において民族のアイデンティティを確立する道も模索されています。伝統絵画を標榜する日本画が洋画と並立し続け、洋画においてもしばしば日本的とされる作風が試み

# Geidai Tanshin

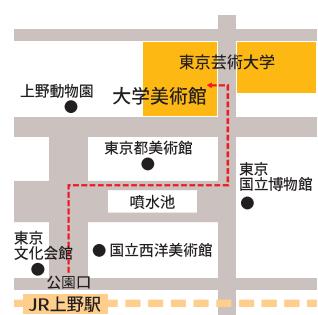
芸大★短信

## 春から夏への 大学美術館

2004.4



2005.3



東京芸術大学大学美術館  
東京都台東区上野公園12-8  
●交通案内  
・JR上野駅（公園口）より徒歩10分  
・駐車場はございませんので、お車でのご来館はご遠慮ください

## 展覧会予定

(2004.4~2005.3)

### 大学美術館本館

#### 「再考：近代日本の絵画」展

##### —美意識の形成とその展開—

4月10日（土）～6月20日（日）

入場料1500円（共通入場券）

#### 横山大観「海山十題」展

7月27日（火）～8月29日（日）

近代日本画の巨匠である横山大観は、新しい日本画の創造を目指して数多くの名作を残した。その画業のなかで有名なもののひとつが、自らの画業50年を記念して専心作画した「海に因む十題」・「山に因む十題」の二十幅である。その作品を含め20点余りを一堂に集め、大観芸術の真髄を展覧する。

有料

#### 芸大コレクション

7月6日（火）～8月29日（日）

入場料300円

#### 開館5周年記念

##### 興福寺国宝展

9月18日（土）～11月3日（水・祝）

興福寺は2010年に創建1300年を迎える。この間、戦乱を幾度となく経て被害を受けてきたが、その都度力強く復興しその偉容を伝えている。興福寺に伝わる鎌倉仏教美術の至宝である鎌倉復興期の彫刻を中心とした諸尊や寺宝30点余りを展示し鎌倉復興造営の成果と意義を紹介する。

有料

#### 開館5周年記念

##### 「HANGA 東西交流の波」展

11月13日（土）～1月16日（日）（※休館12/27～1/4）

17世紀半ばころに制作された木製銅版画印刷機を核とし、19世紀後半から現代にまでわたる東西文化交流とその展開を図像、技法、思想の相互影響関係に注目しつつ、21世紀に入った現在、東西という文化的地理的条件と版画表現の手段を再考する。

有料

#### 芸大コレクション

11月13日（土）～2005年1月16日（日）（※休館12/27～1/4）

入場料300円

#### 退官教育展

1月27日（木）～2月13日（日）

入場無料

#### 卒業・修了制作展

2月21日（月）～2月26日（土）

入場無料

### 陳列館

#### 「東京藝大ガラスの作家たち」展

4月24日（土）～5月9日（日）

2005年4月大学院美術研究科にガラス講座が設置される。これを記念し、芸大出身のガラス作家にスポットをあて、素材としてのガラスが「美術」として社会に認められた、昭和初期から現在に至る日本造形の歴史を展覧する。

入場無料

### 「中国・フランスとの交流展」

5月13日（木）～5月23日（日）

### 日本画第一研究室研究発表展

4月14日（火）～9月20日（月）

### “Chicago-NY-Tokyo”場と現代展

9月24日（金）～10月17日（日）

### 東西の改良楽器をめぐって

10月下旬

### 美術教育研究会

11月中旬

### 版画研究室企画展

11月中旬～12月上旬

### スペル・フェーン展

12月中旬～2005年1月中旬

### 退官教育展

1月27日（木）～2月13日（日）

### 取手館

### アートパス取手

12月上旬



池田遙邨「三尾四季」1942年(昭和17)、本学蔵



杉直全「たかげた」1949年(昭和24)、本学蔵

られています。

日清・日露戦争の戦勝によって日本は

帝国主義の道を進んだものの、第

二次世

界大戦の敗戦によって、政府が築いた体

制は崩壊しました。しかし美術が被った

変化はそれほど甚大ではなかったように

見えます。画壇はいち早く復活し、戦

前、前衛による模索も戦後に継続してい

ます。

されています。

敗戦後の日本は幸運と努力によって復興を迎えますが、こんにちバブルの崩壊後、長引く不況によって社会と経済は大きな見直しを迫られています。近代において信じられてきた直線的な発展史觀が見直されることによって、また価値の多様化により、美術や文化にも先行きの不透明さがもたらされています。このような状況下にあって美術に何が可能でしかねないのか。その問い合わせることは大変な困

難が伴います。しかし近代化の名のもとに自分たちがたどってきたその軌跡を見直すことで、その答えに至るヒントを得ることができるのではないか

ようか。

このような意図のもと、近代以降の絵画史を再構成することによって、そこには大きな役割を果たした美意識の変遷を浮かび上がらせることをこの展覧会は目指しています。

（のぐち・れいじ／大学美術館助手）

※開館時間は、いずれも10時～17時。月曜日休館（ただし月曜日が祝日の場合は開館し、翌日の火曜日休館）。

※展覧会の名称・会期については、変更することがあります。

※展覧会についてのお問い合わせ  
東京芸術大学大学美術館 Tel.03-5685-7755  
NTTハローダイヤル Tel.03-5777-8600

※展覧会の紹介は、下記ウェブサイトでご覧になれます。

<http://www.geidai.ac.jp/museum/>

主催 東京芸術大学（財）東京都歴史文化財団  
東京現代美術館（財）セゾン現代美術館  
\*この展覧会は、同じ会期に二つの会場にわけて開催されます。  
第一会場…第一部 美意識の形成 東京芸術大学  
第二会場…第一部 美意識の展開 東京都現代美術館

# Geidai Tanshin

芸大★短信  
春から夏への  
奏楽堂

2004.4  
↓  
2005.3

## 演奏藝術センター企画『藝大の響き』 『藝大ドヴォルザーク・プロジェクト』

没後一〇〇年を記念した演奏会とレクチャー

松下 功

チエコを代表する作曲家ドヴォルザクは一八四一年に生まれ、一九〇四年に ブラハで亡くなりました。一〇〇四年は、 ドヴォルザーク没後一〇〇年の記念の年 にあたり、世界各地で彼の作品が演奏さ れることでしょう。彼の作品の魅力は 親しみやすく、かつ民族的特徴をもつた 旋律があり、その音楽は世界の多くの 人々から愛されています。創作のジャン ルは交響曲、協奏曲、ピアノ曲、歌曲、 オペラなど多岐にわたっていますが、『藝 大ドヴォルザーク・プロジェクト』では、 彼の主要作品だけでなく、知られざる作 品にも光をあてながら、「ドヴォルザー クとナショナリズム」について考察して いきます。

五月一日には、世界的な指揮者クリ ト・マズアが学生オーケストラとともに 「交響曲第八番」を演奏し、プロジェクト ト・オープニングに花を飾ってくれます。 また、五月中旬から六月中旬までの毎週 土曜日には、初期の作品、名曲等確 立期、成熟期、アメリカ時代、

～晩年の五回のレクチャー＆コンサートが開催されます。それぞれの会では、多彩な講師によるレクチャーとともに、多くの室内樂作品が演奏されます。とりわけ、歌曲として作曲され、後に弦楽四重奏曲に編曲された『糸杉』は、彼の口マンチシズムを象徴する作品として興味深いものがあります。

ドヴォルザークは、自分の弟子であつたヨゼフィナ・チャルマー「ヴァーハーを 愛し、その思いを全一八曲からなる歌曲集『糸杉』にこだめました。結局その 思いは遂げられず、彼はヨゼフィナの妹 チャー・コンサートで、その両方の版を演奏することによって、彼のロマンチズムに触れたいと思います。

一〇〇四年は、同じくチエコの作曲家スマーナの生誕一八〇〇年、ヤナーチェックの生誕一五〇年にあたり、チエコ政府

が世界の大使館を通じて「チエコ音楽祭」を呼びかけています。日本でも九月から十一月にかけてチエコ大使館の呼びかけにより、多くの音楽関係者が参加する音楽祭が催されます。芸大でも二つの公演がその音楽祭に参加しています。

十月二十三日には、「ドヴォルザークとナショナリズム」と題したシンポジウムを開催します。その日の演奏会では、代表作・交響曲第九番『新世界より』とともに、日本初演となるエイミ・ビーチ作曲・交響曲第一番『ゲーリック』を取り上げます。ビーチはアメリカの女流作家で、ドヴォルザークのアメリカでの講演と「新世界より」の初演を聞き、大きな衝撃を受けました。そして、その影響を受けて作曲したのが交響曲第二番『ゲーリック』です。

そのほかにも、弦楽合奏と管絃合奏によると、二つの「セレナード」、演奏機会は多くはないが名作としての誉れ高い「ピアノ協奏曲」、声楽科・藝大フィルの力で結集して挑む、大作「レクイエム」な



右：交響曲第8番のスケッチ  
左：1890年頃のドヴォルザーク



東京芸術大学奏楽堂  
東京都台東区上野公園12-8  
●交通案内  
・JR上野駅（公園口）より徒歩10分  
・駐車場はございませんので、お車でのご来場はご遠慮ください

どなど、二回に及ぶ『藝大ドヴォルザーク・プロジェクト』は、目を離すこと ができるない演奏会となることでしょう。  
なお、平成十六年度は、芸術の過去、 現在、未来を見据え、藝大ならではの視 点に立った、『藝大の響き』『奏楽堂シリ ーズ』『藝大21』の三つを柱とした多く の藝大関係者たちの力を結集した企画が あります。詳しくは藝大公式ホームページ <http://www.geidai.ac.jp>をご覧下さい。

助教授

# 奏楽堂演奏会予定

(2004.4~2005.3)

## 定期演奏会・特別演奏会予定

(藝大ドヴォルザーク・プロジェクトⅠ～XⅡ別掲)

4月15日(木)  
モーニングコンサート 第1回  
11:00開演 入場無料  
【曲目】未定 【管弦楽】藝大フィルハーモニア

4月22日(木)  
モーニングコンサート 第2回  
11:00開演 入場無料

4月23日(金)  
平成16年音楽学部同声会新人演奏会 第1回  
18:30開演 1500円(自由席)  
【声楽・弦楽・管打楽】

4月24日(土)  
平成16年音楽学部同声会新人演奏会 第2回  
14:00開演 1500円(自由席)  
【弦楽・管打樂・鍵盤】

4月24日(土)  
平成16年音楽学部同声会新人演奏会 第3回  
18:30開演 1500円(自由席)  
【声楽・弦楽・管打楽・邦楽】

5月1日(土) ドヴォルザーク・プロジェクトⅠ

5月7日(金)  
和楽の美～宮沢賢治～  
19:00開演 2400円(自由席)  
【曲目】邦楽劇『實治宇宙曼陀羅』(原作:宮沢賢治)  
【出演】赤木直明、安藤妙輝、武田孝史、野村四郎、藤原睦子、三浦正義、山本泰正(邦山)ほか  
藝大邦樂科教官、学生  
【構成・演出】笠井賢一【舞台美術】伊藤隆道

5月13日(木)  
モーニングコンサート 第3回  
11:00開演 入場無料

5月20日(木)  
モーニングコンサート 第4回  
11:00開演 入場無料

5月22日(土) ドヴォルザーク・プロジェクトⅡ

5月27日(木)  
創造の社Ⅰ～ルチアーノ・ベリオ～  
オーケストラ作品(全曲日本初演)  
19:00開演 1800円(自由席)  
【曲目】ファンファーラ(1982)  
フォーカソングス(1973)  
～オーケストラ版～ほか  
【指揮】尾高忠明  
【メゾソプラノ】青木美智子、寺谷千枝子  
【管弦楽】藝大フィルハーモニア

5月29日(土) ドヴォルザーク・プロジェクトⅢ

5月30日(日)  
創造の社Ⅱ～ルチアーノ・ベリオ～  
セクエンツァ完全全曲演奏(作曲年代順)  
15:00開演 1800円(自由席)  
【出演】vn.:澤和樹 cl.:村井祐児ほか

6月1日(火)  
藝大定期邦楽第68回  
18:30開演 1800円(自由席)  
【出演】藝大邦樂科の教官及び学生

6月3日(木)  
モーニングコンサート 第5回  
11:00開演 入場無料

6月5日(土) ドヴォルザーク・プロジェクトⅣ

6月10日(木)  
モーニングコンサート 第6回  
11:00開演 入場無料

6月12日(土) ドヴォルザーク・プロジェクトⅤ

6月13日(日)  
上野の森 オルガン・シリーズ  
～賛歌の系譜Ⅰ～  
15:00開演 1800円(自由席)  
【曲目】クラヴィーア練習曲集第3巻  
(『ドイツ・オルガンミサ曲』)全曲(J. S. バッハ)  
【オルガン】廣野智雄、鈴木雅明、今井奈緒子

6月18日(金)  
藝大定期オーケストラ第308回  
新卒生紹介演奏会  
18:30開演 1300円(自由席)

6月19日(土) ドヴォルザーク・プロジェクトⅥ

6月25日(金) ドヴォルザーク・プロジェクトⅦ

6月26日(土) ドヴォルザーク・プロジェクトⅧ

6月29日(火)  
～イタリアオペラ・ガラコンサート～  
ベルカントからヴェリズモの流れの中で  
18:30開演 1800円(自由席)  
【曲目】オペラ「ノルマ」より「清き女神」  
(ベッリーニ)ほか

【指揮】佐藤功太郎  
ハンス=マルティン・シュナイ特  
【出演】林康子、直野資、佐藤ひさら、高木二ほか  
【管弦楽】東京藝術大学音楽学部学生オーケストラ

7月1日(木)  
モーニングコンサート 第7回  
11:00開演 入場無料

7月8日(木)  
モーニングコンサート 第8回  
11:00開演 入場無料

7月11日(日) ドヴォルザーク・プロジェクトⅨ

7月15日(木)  
モーニングコンサート 第9回  
11:00開演 入場無料

7月17日(土)  
時の響き～ジャズ in 藝大～

グレゴミラー、デューク・エリントン、

カウント・ベリー、そして黛敏郎

17:00開演 2400円(自由席)

【曲目】10楽器のためのディベリティメント(黛敏郎)、ムーンライト・セレナードほか

【出演】森寿男とブルーコーツ Vc.:ホリートモコ、尺八:山本泰正(邦山) Tp.:杉木峯夫、Vn.:澤和樹 Db.:永島義男 Manto Vivo(藝大学生有志)ほか

9月9日(木)  
モーニングコンサート 第10回  
11:00開演 入場無料

9月16日(木)  
アジア・躍動する音たち

～アジアの協奏曲～シンポジウム「アジアのアイデンティティⅡ」(仮題)  
17:00開演(5-109講義室) 入場無料

コンサート 19:00開演 1800円(自由席)

【曲目】中国：暗香～古箏とオーケストラのための～  
日本：尺八とオーケストラのための協奏曲  
韓国：ビリとオーケストラのための協奏曲  
ウズベキスタン：タンブルとオーケストラ  
のための協奏曲

【指揮】若杉弘(尺八) 山本泰正(邦山)ほか

9月19日(日)  
藝大とあそぼう～ゆかいいな動物園～

14:00開演 1300円(自由席)

【曲目】童話『ゾウさん』、『動物園へ行こう』、『犬の大おわりさん』ほか  
【歌・器楽アンサンブル】藝大院生・学部学生  
【オルガン】浅井美紀

10月9日(土)  
藝大定期オペラ第50回 第1日

2400円(自由席)

10月10日(日)  
藝大定期オペラ第50回 第2日

2400円(自由席)

10月23日(土) ドヴォルザーク・プロジェクトX

10月31日(日)  
上野の森 オルガン・シリーズⅡ

～贊歌の系譜Ⅱ～

15:00開演 1800円(自由席)

【曲目】『主の降臨』全曲(メシャン)  
【オルガン】早島万紀子ほか

11月4日(木)  
室内楽演奏会

ハイドン弦楽四重奏曲全曲演奏シリーズ その6 第1夜

19:00開演 1300円(自由席)

11月5日(金)  
室内楽演奏会

ハイドン弦楽四重奏曲全曲演奏シリーズ その6 第2夜

19:00開演 1300円(自由席)

11月6日(土)  
附属音楽高等学校 定期演奏会

入場無料(要整理券)

11月8日(月)

藝大定期吹奏楽第70回

18:30開演 1300円(自由席)

11月19日(金) ドヴォルザーク・プロジェクトXI

11月20日(土)

～うた“シリーズⅡ

～名曲でたどるパノラマ・フランス歌曲～

17:00開演 1800円(自由席)

11月25日(木)

モーニングコンサート 第11回

11:00開演 入場無料

11月26日(金)

藝大定期オーケストラ第312回

～学生オーケストラ演奏会～

18:30開演 1300円(自由席)

11月30日(火)

藝大定期邦楽第69回

18:00開演 1800円(自由席)

12月12日(日) ドヴォルザーク・プロジェクトXII

2005年2月9日(水)

藝大定期室内楽第31回 第1日

18:30開演 1300円(自由席)

2月10日(木)

モーニングコンサート 第12回

11:00開演 入場無料

2月10日(木)

藝大定期室内楽第31回 第2日

18:30開演 1300円(自由席)

2月13日(日)

管楽器シリーズⅡ

～藝大プラスの歴史をふり返って～

15:00開演 1800円(自由席)

2月18日(金)

藝大定期オーケストラ第309回

19:00開演 1800円(自由席)

【曲目】ピアノ協奏曲ト短調B.63(作品33)(ドヴォルザーク)ほか

【指揮】小林研一郎【ピアノ】植田克己  
【管弦楽】藝大フィルハーモニア

6月26日(土)

VI ～レクチャー・コンサート第4回～

1800円(自由席)

レクチャー「アーミカ時代」 17:00開演

“8つのユーモレスク” B.187(作品101)抜粋

コンサート 18:30開演

【曲目】弦楽五重奏曲変ホ長調B.180(作品97)

「アメリカ」ほか

【出演】Vn.:田中千香士、Va.:菅沼準二、SAWA QUARTET、Pf.:鈴木慎嵩ほか

6月19日(土)

VI ～レクチャー・コンサート第5回～

1800円(自由席)

レクチャー「晩年」 17:00開演

“糸杉”(弦楽四重奏版) B.152(抜粋)

コンサート 18:30開演

【曲目】ピアノ四重奏曲変ホ長調B.162(作品87)

糸杉(歌詞) B.11 ほか

【出演】Pf.:伊藤恵、岡田明子 Vn.:白井圭、浦川宜也、守屋剛志 Va.:菅沼準二、大野かおる、Vc.:山崎伸子、松本卓似 M-Sop.:寺谷千枝子 予ほか

6月25日(金)

VII 藝大定期オーケストラ第309回

19:00開演 1800円(自由席)

【曲目】ピアノ協奏曲ト短調B.63(作品33)(ドヴォルザーク)ほか

【指揮】小林研一郎【ピアノ】植田克己

【管弦楽】藝大フィルハーモニア

6月26日(土)

VIII 藝大定期オーケストラ第3回定期演奏会

17:00開演 1300円(自由席)

【曲目】オペラ「カブリッヂオ」(作品85)より  
「六重奏」(R.シュトラウス) 一チャバ(編曲ほか)

【指揮】ベーター・チャバ

7月11日(日)

IX 管楽器シリーズ I ～チェコ音楽の魅力～

15:00開演 1800円(自由席)

【曲目】4本のトランペットとティンパニのための  
『ファンファーレ』 B.167ほか

【出演】Tp.:杉木峯夫 Cl.:村井祐児 Pf.:渡邊健二、丸山滋ほか

10月23日(土)

X チェコ音楽祭 2004 参加演奏会

シンポジウム「ドヴォルザークとナショナリズム」(仮題)

14:00開演(音楽学部5-109講義室) 入場無料

共催:日本音楽学会関東支部

藝大定期オーケストラ第310回

17:00開演 1800円(自由席)

【曲目】交響曲第2番 ホ短調『ゲーリック』作品32(32)

(エイミ・ピーチ) 一日初演～ほか

【指揮】佐藤功太郎

【管弦楽】藝大フィルハーモニア

11月19日(金)

X I チェコ音楽祭 2004 参加演奏会

藝大定期合唱・オーケストラ第311回

19:00開演 1800円(自由席)

【曲目】レクイエムB.165(作品89)

【指揮】ハンス=マルティン・シュナイ特

【独唱】未定

【管弦楽】藝大フィルハーモニア

【合唱】東京藝術大学音楽学部声楽科学生

12月12日(日)

XII “うた”シリーズⅢ

～「オーカル・アンサンブルの魅力～

15:00開演 1800円(自由席)

【曲目】モラヴィア二重唱曲B.60(作品29(32))

(ドヴォルザーク)ほか

【出演】藝大オーカル・ソロイズツほか

※平成16年1月31日現在の予定表です。

今後、演奏会内容、日程等については、変更することがあります。

※演奏会の曲目、開演時間等の詳細については、決定次第、大学ホームページで発表します。

<http://www.geidai.ac.jp>

※チケットの取り扱い

チケット販賣 Tel.0570-02-9990/東京文化会館チケットサービス Tel.03-5815-5452/東京芸術大学美術館ミュージアムショップ Tel.03-5685-1176

※演奏会のお問い合わせ先

演奏芸術センター演奏係 Tel.03-5685-7700

